

平成 27 年度読書週間事業

いわき総合図書館 企画展配布資料

袋 たい

中 ちゅう

上 しょう

人 にん

いわき・沖縄・京都



いわき市立いわき総合図書館

いわき市平字田町 120 ラトブ 4・5 階

TEL 0246-22-5552

<http://library.city.iwaki.fukushima.jp>



『袋中上人絵詞伝』(原田禹雄 訳注 榕樹書林)より

はじめに

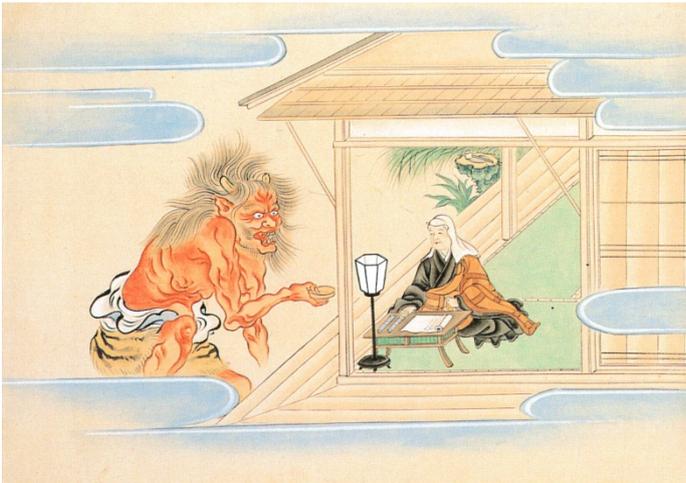
平成 27 年度読書週間事業として企画展「袋中上人 - いわき・沖縄・京都 - 」を開催いたします。

袋中上人は天文 21(1552)年、いわき市常磐で生まれ、慶長 8(1603)年には中国(明)への渡航を試みましたがかなわず、その後、3 年間、沖縄(琉球)にとどまり、中国(明)渡航の機会を待ちましたが、終に望みはかなえられませんでした。

沖縄(琉球)滞在中、袋中上人は沖縄(琉球)の歴史書『琉球神道記』を著し、琉球国王・尚寧王など、沖縄(琉球)の人たちと心からの交流をしました。

本企画展を御観覧のうえ、いわきの歴史の一場面思いをはせていただければ幸いです。最後に、多くの方々のご協力に感謝を申し上げ、あいさついたします。

いわき総合図書館長 夏井 芳 徳



『袋中上人絵詞伝』【第 11 図 疫鬼影現】

◆袋中菴蔵『袋中上人絵詞伝』より

江戸時代に描かれた絵巻物。色鮮やかな絵と詞書で、袋中上人の一生を如実に伝えている。



『袋中上人絵詞伝』【第 12 図 琉球行化】

袋中上人の生涯

袋中上人たいちゅうしょうにんは、戦国時代の天文 21(1552)年、現在のいわき市常磐の生まれで、幼名は徳寿丸といました。7歳の時に能満寺(いわき市常磐西郷町)の天蓮社良要上人(叔父)あざなにあずけられ、14歳で出家。字は袋中いみな、諱は良定、号は弁蓮社入観としました。

その後、如来寺、専称寺(ともにいわき市平山崎)、円通寺(栃木県芳賀郡益子町)などで修学します。さらに、25歳で増上寺(東京都港区)に入ります。また、この頃には足利学校(栃木県足利市)にも赴き、浄土宗以外の教えなども広く学びました。

諸国を旅しながら修行を続けたのち、天正 8(1580)年、成徳寺じょうとくじ(双葉郡広野町折木)の第 13 代住職として帰郷します。袋中上人 29 歳の時でした。

慶長 4(1599)年には、いわき地方などを支配していた戦国大名、岩城貞隆が、好間町大館の飯野平城ぼだいじん内に菩提院を建立し、袋中上人を住職として招きました。

ところが、関ヶ原の合戦(1600 年)で徳川側にならなかったことで、慶長 7 (1602)年、岩城貞隆は家康により、12 万石の領地を没収され、身柄を江戸に移されます。これにより、菩提院も城外に移るようになりました。

袋中上人はこれを機に、「中国(明)に渡って修行し、学問を深めたい」というかねてからの希望をかなえるため、郷里を離れる決意をします。52 歳でした。

当時の日本は中国(明)との国交がなく、袋中上人は渡明を試みますが入国は許されず、フィリピンを

経て、沖縄(琉球)に上陸し、その後 3 年を沖縄(琉球)で過ごすこととなります。袋中上人は沖縄(琉球)でも熱心に布教し、琉球国王・尚寧王しょうねいおうの帰依を得て、浄土念仏を伝えました。

慶長 11(1606)年に帰国の途につくと、郷里には帰らず、京都や奈良などで布教活動を行いました。なかでも京都の伏見屋次郎兵衛は深く袋中上人に帰依し、三条大橋近くに草庵を建て上人を招きました。これが、後の檀王法林寺だんのうほうりんじ(京都府京都市左京区)です。

袋中上人は、その後も各地で寺院を再建するなどし、寛永 14(1637)には、山城飯岡いのおかに庵を結びます。これが後の西方寺さいほうじ(京都府京田辺市飯岡)です。

寛永 16(1639)年、袋中上人はこの飯岡でその生涯を閉じました。88 歳でした。



「袋中上人像(尚寧王画賛)」(部分)
京都・檀王法林寺蔵

袋中上人ゆかりの寺 《いわき時代》



◆能満寺 いわき市常磐西郷町忠多

文明元(1469)年、松蓮社良秀上人が開山。袋中上人は 14 歳のとき、能満寺で出家し僧侶となった。山門脇には「袋中上人誕生之地」の碑がある。

◆如来寺 いわき市平山崎字矢ノ目

袋中上人は 16 歳のとき、当時、学問の寺として名を馳せていた如来寺に入り、学問に励んだ。



◆専称寺 いわき市平山崎字梅福山

袋中上人は 20 歳になると、如来寺から専称寺にうつり、なお一層学問に打ち込んだ。



じょうとくじ

◆成徳寺 福島県双葉郡広野町大字折木字館
諸国を巡り、学問、修行を積み重ねた袋中上人
は、29歳の時に強い招きを受け、郷里いわきに
程近い成徳寺の住職になった。



ぼだいん

◆菩提院 いわき市平古鍛冶町

慶長 4(1599)年、袋中上人開山。

時の領主、岩城貞隆は袋中上人に深く帰依し、
大館の飯野平城内に称名道場を造り、菩提院
と名づけ、袋中上人を住持として招いた。袋中
上人 48 歳のときだった。

慶長 7(1602)年、鳥居氏が入封すると、寺は城
外に移され、大正 6～7(1917～18)年に現在
の地に移転した。

沖縄と袋中上人

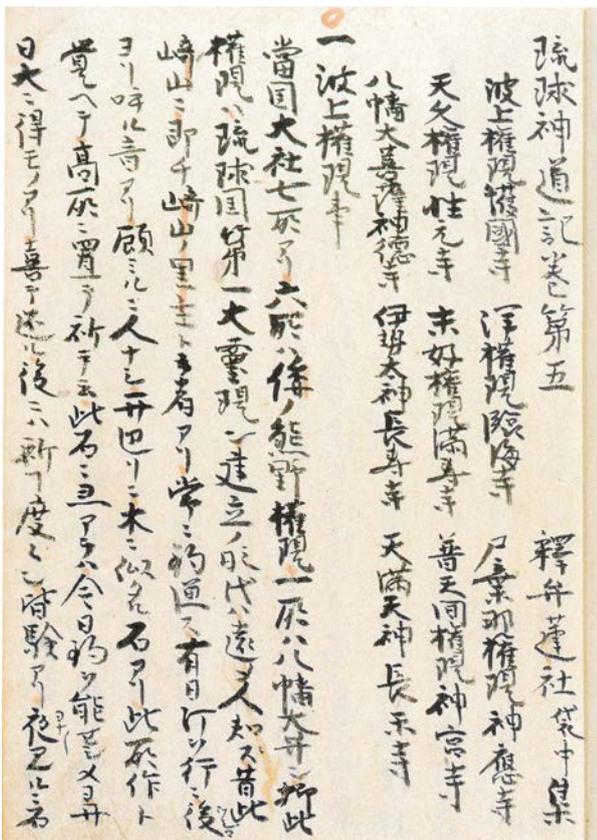
いわきを離れ、中国(明)へ渡ろうと決意した袋中上人でしたが、当時の日本は中国(明)との国交がなく、袋中上人は渡明を試みますが、入国を許されず、一旦、フィリピンまで行き、そこから沖縄(琉球)に上陸し、その地で3年を過ごしました。

袋中上人は沖縄(琉球)滞在中も、浄土念仏の布教に努めました。琉球国王・尚寧王は深く帰依し、袋中上人のために桂林寺(沖縄県那覇市松山)を建立しました。京都の檀王法林寺に残されている「袋中上人像(尚寧王画賛)」は、尚寧王が描いたものです。

浄土念仏は、琉球中に広まりましたが、袋中上人が去ったのち、しだいにすたれてしまい、現在唯一「小^お禄浄土」の名で那覇市小禄に伝えられています。

この那覇市小禄には、昭和 50(1975)年、沖縄における浄土宗布教の由緒と、袋中上人の業績をたたえるため、浄土宗別院袋中寺が創建されました。

また、袋中上人が著した琉球国の歴史書『琉球神道記』は、薩摩藩による征服以前の古琉球の風俗・伝承を知るうえで、きわめて貴重な文献史料となっています。



「袋中上人行化碑」沖縄県那覇市・松山公園内
【写真提供】沖縄県立図書館

りゅうきゅうしんどうき

◆『琉球神道記』 国指定重要文化財 京都・袋中菴蔵

江戸時代の初め、袋中上人が著した沖縄(琉球)の歴史書。

この世の成り立ちやインドでの仏教の起こり、中国の歴代王朝の歴史、諸仏の由来、沖縄(琉球)の神々、さらには沖縄(琉球)の国生みの神話や伝説、人々の暮らしなどが記されている。

「エイサー」と「じゃんがら念仏踊り」



◆沖縄の伝統芸能・エイサー

太鼓や三線、歌に合わせ、太鼓の叩き手や踊り手たちが踊りを繰り広げるもので、沖縄本島や八重山地域、さらには沖縄ゆかりの地などで広く伝えられています。

起源には諸説がありますが、袋中上人が沖縄に伝えた念仏や念仏踊りがエイサーに影響を与えたともいわれています。

◆いわきの郷土芸能・じゃんがら念仏踊り

いわき市を中心に分布・伝承する郷土芸能で、鉦、太鼓を打ち鳴らしながら新盆を迎えた家などを供養してまわる踊念仏の一種です。

主に毎年8月13日から15日までの3日間行われ、いわきの夏の風物詩として知られています。

いわき市の無形民俗文化財に指定されています。



「エイサー」と「じゃんがら念仏踊り」は、ともに祖先の霊を弔うもので、お盆の時期を中心に踊られます。

いわきと沖縄の人たちは、「エイサー」や「じゃんがら念仏踊り」を通じて、現在も交流を続けています。



いわき市常磐西郷町の子供じゃんがら。
平成27年、沖縄県那覇市でじゃんがらを披露。

浜風商店街に沖縄の音色響く
都内のエイサー団体が力強く躍動的な演舞披露

大太鼓の力強いリズムが沖縄の音色が響き渡った浜風商店街

沖縄の伝統芸能・エイサーを通じて復興を願う「いわきを援く」中野区復興商店街「浜野から元気と笑顔を届く」風商店街を訪問した。17日午後には、久之野から元気と笑顔を届く風商店街を訪問した。三線の小気味よいメロディ、大太鼓の力強いリズムが響き渡る中、商店街の通路を所々染めました。最後に登場した「東京中野区新風エイサー」京中野区新風エイサー「新沖縄獅子研究会」は地域住民と一緒「東京中野区南風エイサー」に力チャージを舞「守礼会」一上石神井 一行は町内各所を巡回し、琉球エイサー会から、住宅、菩提院、能楽寺、約50人。毎年7月に東京市観光物産センター、京中野区で開かれる「いわき・ら・みエイサーイベント」に参エウ、市災害公営住宅加してあり、じゃんがら宅（豊岡団地）豊岡から念仏とエイサーの縁復興商店街とごま丸から、有志が定期的に「シエ」も訪れた。

「いわき民報」(平成27年5月18日)

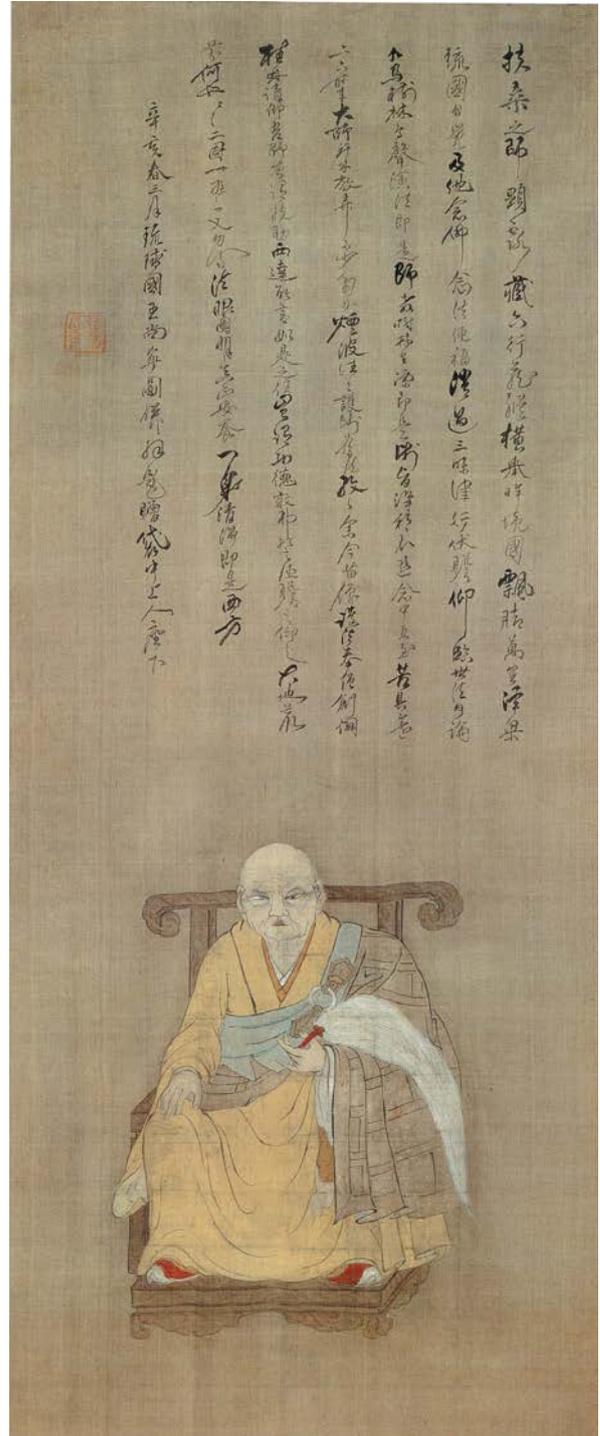
琉球国王・尚寧王と袋中上人

沖縄(琉球)滞在中、桂林寺(沖縄県那覇市松山)の住職として迎えられた袋中上人は、仏の教えを説き、念仏を勧め、多くの人々からあつい信仰を寄せられるようになりました。琉球国王・尚寧王も、袋中上人を師と仰ぎ、帰依しました。その帰依の深さを知ることができるものとして、「袋中上人像(尚寧王画賛)」があります。

袋中上人が沖縄を離れて3年後の慶長14(1609)年、薩摩藩の琉球侵攻により、尚寧王は捕われの身となってしまいます。「異国の王」として、駿府で徳川家康に、江戸で将軍・徳川秀忠に謁見した帰途、薩摩で袋中上人の還暦を祝うため、尚寧王は自ら筆をとり、袋中上人の肖像画を描きました。

肖像画には、尚寧王の文章も添えられました。そこには「扶桑之師」、つまり、日本の師、袋中上人は遠く、沖縄(琉球)の地を訪れ、「念仏念法、便福消過」、念仏を勧め、仏の教えを説き、私たちに幸せをもたらしてくれたことや琉球国は薩摩藩に敗れ、「大地荒蒙」、国土は荒廃してしまいましたが、そのようななかにあっても袋中上人の教えは私たちの心の中で生き続けている。私たちは袋中上人の教えをこれからもしっかりと守り続けていかなければならない、と書かれています。

文章の終わりに、「琉球国尚寧王図し、併せ題し、袋中上人座下に贈る」と、つつしみ深く、へりくだった態度で書かれてあることから、その帰依の深さをうかがい知ることができます。



「袋中上人像(尚寧王画賛)」
尚寧王筆 江戸時代 慶長16(1611)年
京都・檀王法林寺蔵

京都での袋中上人

沖縄(琉球)で3年を過ごした袋中上人は、慶長11(1606)年に帰国の途につくと、郷里のいわきには帰らず、奈良や京都などで布教活動を行いました。

慶長16(1611)年、60歳のときには、京都の三条大橋近くに檀王法林寺を開き、多くの信者の協力のもと寺域を拡大します。

その後は、洛北氷室(京都府京都市北区)、東山菊

溪(京都府京都市東山区)に小庵を結び、71歳のときに五条坂袋中庵(京都府京都市東山区 現在は京都市右京区花園にある)へ移ります。

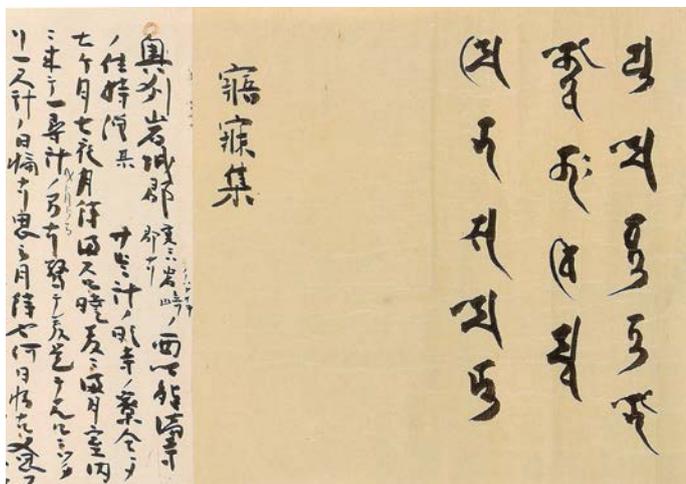
晩年は、瓶原心光庵(京都府木津川市加茂町)など、奈良や京都各地で寺院を再建し、寛永16(1639)年、西方寺(京都府京田辺市飯岡)で亡くなりました。88歳でした。



だんのうほうりんじ

◆檀王法林寺 京都市左京区川端通三条上ル

慶長16(1611)年、袋中上人が、永禄年間に焼失した悟真寺の跡地に開山。京都の伏見屋次郎兵衛により寄進。袋中上人は9年後に、弟子の團王上人に寺を譲って東山五条坂に袋中庵を創建し移り住む。平成23(2011)年は、開創400年にあたる。



ごびしゅう

◆『寤寐集』 京都府指定文化財 京都・檀王法林寺蔵 奈良女子大学学術情報センター画像提供

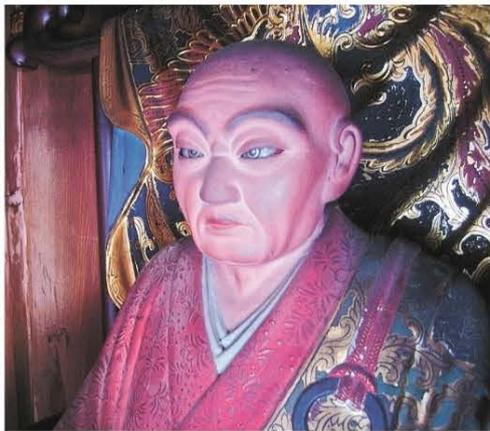
「寤(ご)」は目覚めていること、「寐(び)」は寝ていること。袋中上人が夢で見たことや、実際に体験したことなどを記したものの。京都時代の寛永3(1626)年以後に書かれたものといわれている。

福島と沖繩を結んだ名僧

袋中 上人 ①

袋中上人は戦国時代の天文に当たる。二十一(一五五二)年、岩城郡とて言い表すと、それは「知と西郷町」にまれ、寛永十六(一六三九)年、京都の地で亡くなった。浄土宗の僧である。

今年、袋中上人が能満寺(いわき市常磐西郷町)で剃髪出家した永禄八(一五六五)年、幼いころから学問に自ら教え、四百五十年の節目の年、覚め、学問に励んだ。



袋中上人座像(頭部)。袋中上人の遺徳を祝い、慶長16(一六一)年、琉球国王である尚寧王が自ら筆を執って描いた「袋中上人像(尚寧王画)」を参考に、昭和初期に作られた。菩提院(いわき市平沼治町)蔵

出家から450年 知と徳の人

諸国を巡り修行積む

く寺に入れ、学問を積ませるのは、さらに専称寺(いわき市平山崎)に移り、なお一層、学問で、能満寺の住職を務めていた。天運社長要上のもとに預けることにした。



袋中上人誕生地之碑。昭和13(1938)年、袋中上人の没後300年を記念し、檀王法林寺(京都市左京区川端三条上ル)が中心になり、袋中上人の誕生地に近く、袋中上人が学び、14歳の時に出家した能満寺(いわき市常磐西郷町)に建立された

袋中上人の生涯を如実に伝える『袋中大給前伝』(二巻、江戸時代・八世紀)に次のようなエピソードが紹介されている。「上人、七歳の春、一夜、眼より光を放つ。父母、驚き見て曰く、この小童凡庸のともがらにあらず。しかし、早く塵俗を脱して、精進入れしめんにはとて、天運社長の叔父なれば、その許送り」

慶長四(一五九九)年、四十八歳の袋中上人の身に起きた超常的なエピソードがある。その時、関東地方のいわきでは流行り病が猛威を振るい、多くの人が苦しんでいた。そんなある日の夕刻、袋中上人の前に一人の老人が忽然と姿を現した。

「あなたはなになですか？」袋中上人が尋ねると、その老人は「私は疫病神だ」と答えた。「あなたは、なぜ、病気を流行らせ、人々を苦しめるのですか？」

袋中上人は真つすぐに老人を見つめ、問いを発した。すると、老人は「それは私のせいではない。人間どもが勝手に病気にかかり、苦しんでいるだけのこと」と偽りの答えを返し、突如として身の丈十指ほどの鬼に姿を変えた。

しかし、袋中上人は少しも驚かなかった。「取って喰ってやろうか」と鬼はそのような気配をみながら、迫り来たが、袋中上人は恐れ、たじろぐこともなく、

「この病気を鎮めるためには、どうすればよいのですか？」と鬼に尋ねた。

病気の苦しみを人々を救いたい、そのためには、おのれの命など、どうなってもよい。袋中上人の思いは、その一点に注がれていた。

【袋中上人の年譜】

- ▶天文21(1552)年1月 現在のいわき市常磐西郷町に生まれる。幼名は徳寿丸、字は弁蓮社、良定、入観、名は袋中。
- ▶永禄元(1558)年春 能満寺(いわき市常磐西郷町)の天運社良要上人のもとで学ぶ。
- ▶永禄8(1565)年3月14日 能満寺で剃髪、僧侶となる。
- ▶永禄10(1567)年春 如來寺(いわき市平)に学ぶ。
- ▶元龜2(1571)年 専称寺(いわき市平)、円通寺(栃木県芳賀郡益子町)に学ぶ。
- ▶天正2(1574)年 円通寺で経論を講じる。
- ▶天正4(1576)年春 増上寺(東京都港区)や足利学校(栃木県足利市)などで学ぶ。

- ▶天正8(1580)年 成徳寺(双葉郡広野町)の住持となる。
- ▶天正9(1581)年 鎌田川(夏井川)で橋供養を行う。
- ▶慶長4(1599)年春 飯野平城内の菩提院の住持となる。
- ▶慶長7(1602)年 中国(明)渡航を志し、いわきを離れる。
- ▶慶長8(1603)年 京都を出、広島を経、九州から船出。中国(明)上陸はかなわず、フィリピンを経、沖繩(琉球国)に渡る。桂林寺(那覇市松山)の住持となる。
- ▶慶長11(1606)年 沖繩(琉球国)を離れる。
- ▶慶長16(1611)年春 京都の三条河原町に庵(後の檀王法林寺)を結ぶ。
- ▶寛永14(1637)年 京田辺市飯岡に庵(後の西方寺)を結ぶ。
- ▶寛永16(1639)年1月21日 永眠。享年88。



【筆者】
夏井 芳徳

昭和34年、いわき市生まれ。磐城高、京大文学部国語学文学科卒。平成26年、石原村キツネ裁判「三川タムス」取材ノートで第1回福島県学賞(小説・ドラマ部門)正賞受賞。いわき明星大学客員教授。いわき地域学会副代表幹事。いわき市立いわき総合図書館長。

福島と沖縄を結んだ名僧

袋中 上人 ②

天正八（一五八〇）年、数え年二十九で成徳寺（双葉郡広野町折木）の住持となった袋中上人は、その後も学問を積み、その成果の一端を著作として残した。

天正十一（一五八三）年には『血脈論』、天正十三（一五八五）年には『大原問答端書』、天正十五（一五八七）年には『啓袋中』を著した。

また、天正十八（一五九〇）年、数え年三十九の時には、平安時代の僧、源信（恵心僧都）

飯野平城跡。いわき地域などを支配した戦国大名、岩城氏は居城を飯野平城に置いた。写真中央の山がそれである。袋中上人は岩城貞隆の求めにより、飯野平城内に建てられた菩提院の住持となり、日々、「六時勤行」「念仏六万遍」を行った



戦国大名岩城氏も帰依

でないが、もの本による「南無阿弥陀仏」を二万回唱えるには約三時間を要するというから、袋中上人は「南無阿弥陀仏」を三時間一万回、一心不乱に唱えては二時間の休息を取り、また、念仏を三時間唱え、一時間休息するという超人的な勤めを昼夜の別なく、日々、繰り返していたのではないかと考えられる。

また、この頃には、多くの人

訪中かなわず、沖縄へ

々が袋中上人に篤い信心を寄せようになっていた。いわき地方などを支配していた戦国大名、岩城貞隆もその一人だった。

慶長四（一五九九）年、貞隆は自らの居城、飯野平城内に菩提院という寺を建て、袋中上人を住持に招いた。これも袋中上人は天時勤行を続け、南無阿弥陀仏と唱えれば、極楽往生がかなうとの教えを説いた。

この合戦で徳川家康に加勢しなかった岩城貞隆は慶長七（一六〇二）年、十二万石の領地没収のうえ、身柄を江吉に移された。領主貞隆を失った家臣たちは、いわきを離れ、他家に仕官したり、いわきにとどまり、農業に従事したり、新たな磐城平藩主となった鳥居忠政に仕えたりした。

しかし、結局、その機会は訪れなかった。

袋中上人がいわきの地に残した菩提院は、鳥居忠政が新たな城、磐城平城を築造する際、城から城下町に移された。その場所は現在のいわき市平の本町通りと銀座通りが交わるあたりだった。その後、さらに現在の平字十五丁目、いわき中央警察署十五丁目交番があるあたりに移され、そして、大正時代には平字古鍛冶町の現在地に移転した。

ところで、世間では、袋中上人が沖縄に「じゃんがら念仏踊り」を伝え、それがもとになって、沖縄の伝統芸能「エイサー」が始まったとする説が一部に流布している。

だが、最新の研究によると、いわきで「じゃんがら念仏踊り」が最初に行われたのは、磐城平藩が小川江筋という農業用水路を整備した際に活躍した沢村勘兵衛の一團が行われた明暦二（一六五六）年七月のこととされている。袋中上人は、それより五十年以上も前の慶長七（一六〇二）年に、いわきを離れ、その翌年に沖縄（琉球）に渡っているのだから、袋中上人がいわきの「じゃんがら念仏踊り」を沖縄（琉球）に伝えられるはずがない。

菩提院での「エイサー」の演奏。これまで、幾度となく、「エイサー」や沖縄獅子舞の継承団体が袋中上人ゆかりの寺、菩提院（いわき市平字古鍛冶町）を訪れ、演奏を行っている。太鼓三線さんしん（左）そして、歌声が境内に響く



いわきを離れ、京都に向かった。

慶長八（一六〇三）年、袋中上人は京都を出立し、広島を経、九州に渡り、中国（明）に向け、出陣した。しかし、当時、中国（明）は豊臣秀吉による二度の朝鮮戦役を受け、日本を敵視し、日本人の入国を認めなかった。

そのため、袋中上人は一旦、フィリピン（呂宋・魯宋）にまで行った。それは袋中上人の直弟子、東暉良閑の著作『飯岡西方寺開山記』の「漢土ノ着岸ヲ志ザスト雖モ、堅ク旅船ヲラス。故、呂宋南甯遠流ヲ凌ギ、風ニ依テ至ルニ（以下略）」という記述や袋中上人が自ら著した『瘡痍集』の「魯宋ニテ着岸ノ時、其国ヨリ海中ノ船ヲ責メト云。又、海中ヨリ國ヲ攻ト云テ、大ニ乱ス。敵、御方騒ギ乱ル。我、船中ノ人々ニ告云、事有マシ、頻リニ静ム。其ノ如ク雑説ニシテ、明日ハ一和スとの記述から知ることができ、その後、袋中上人は三年余の間、沖縄（琉球）にとどまり、中国（明）渡航の機会を待った。

しかし、袋中上人が沖縄（琉球）の人々に仏の教えを説き、「南無阿弥陀仏」「南無阿弥陀仏」と唱えるよう勧めたことが「エイサー」に何らかの影響を与えたことは確かなことだ。

（筆者は、いわき明星大学客員教授の夏井芳徳氏）

|| 次回は26日に掲載 ||

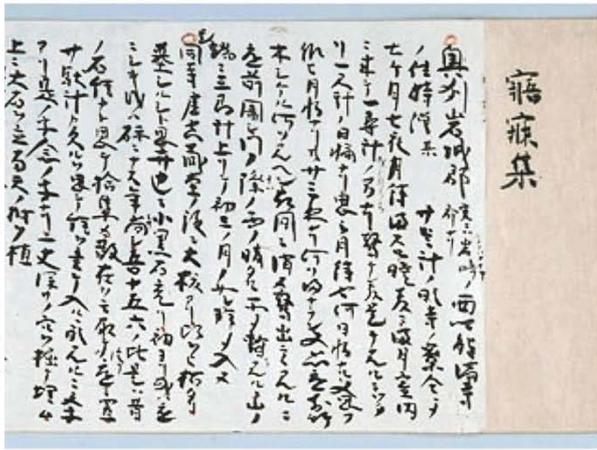
袋中 上人 ③

自分の学問を深めるため、中国(明)への渡航を目指した袋中上人は三年間、沖縄(琉球)の地にどまり、機会を待った。しかし、その日はなかなか訪れなかった。

その間、桂林寺(沖縄県那覇市松山)の住持に迎えられた袋中上人は、仏の教えを説き、念

仏を勧め、多くの人々からあつた。琉球国王の尚寧王も、袋中上人を師と仰ぎ、帰依した。

当時の様子を袋中上人の直弟子、東暉良閑はその著書『飯岡西方寺開山記』に「講シテ、桂林寺ニ住シメ、一國拳テ知徳ト称シテ、化ニ随ハサルモ、



『龍溪集』「福」(一)は目録めいていること、「疎」(二)は書いてあること。袋中上人が夢で見たことや素顔に体験したことなどを記したものを「夢永三」(1566)年以後に書かれたものといわれている。袋中上人自筆。京都府指定文化財。檀王法林寺蔵

沖縄で仏の教え説く

「シ」と記している。

慶長十一年(一六〇〇)年、袋中上人は中国(明)への渡航を断念し、沖縄(琉球)をあとにした。その三年後の慶長十四(一六〇九)年、琉球国は薩摩藩の侵攻を受け、破れ、支配を受けることになった。

捕らわれの身となった尚寧王は、翌年の慶長十五(一六〇〇)年、薩摩藩主の島津家久に連れられ、駿府で徳川家康に、江戸で徳川秀忠に拝謁した。そしてその帰り道、薩摩の地で、尚寧王は袋中上人の遺體を祝うため、自ら筆をとって、袋中上人の肖像画を描き、それを京

を進め、仏の教えを説き、私たちに幸せをもたらしてくれたことや琉球国は薩摩藩に敗れ、天地荒荒、国土は荒廃してしまつたが、そのようななかにあつても袋中上人の教えは私たちに心の中で生き続けている。私は袋中上人の教えをこれからはしっかりと守り続けていかなければならないと書かれてい

沖繩(琉球)滞在中、袋中上人は熱心に布教を行つたが、その一方で、琉球国の高官、馬幸明の強い求めに応じ、琉球国の歴史書『琉球神道記』を著し

琉球国の歴史書著す

都で暮らす袋中上人に贈つてい

肖像画には尚寧王の文章も添えられた。そこには扶桑之師、つまり、日本の師、袋中上人は遠く沖繩琉球の地を訪れ、「念仏念法」便福消過、念仏

『琉球神道記』は三巻構成で、第一巻には三界、須弥山、四州など、この世の仕組みや成り立ちが記され、第二巻にはインドでの仏教の始まりが記され、第三巻には夏股、周、秦、漢、隋、唐、宋、明など中国の

臨テ、止ヤンコトナクシテ、卑儼ヲ吐、瀟湘ノ題ヲ假テ八首ヲ呈ス、つまり、中国の瀟湘八景になつて、「那覇夜雨」「東瀟秋月」「末吉晚鐘」「泊汀落雁」「西崎帰帆」「金岳暮雪」「首里晴嵐」「洋城夕

由來や伝承などが記され、さらには沖繩(琉球)の国生みの神話や昔話、伝説、そして、当時の沖繩(琉球)の人たちの暮らしぶりなども記されている。

また、第五巻の最末尾には、有山々、景色、浦々ノ眺望ニ

王朝の歴史が記され、第四巻には釈迦如来や薬師如来、阿弥陀如来、大日如来、文殊菩薩、普賢菩薩、観世音菩薩、千手観音菩薩、勢至菩薩、地藏菩薩、虚空蔵菩薩、弥勒菩薩など、仏にまつての記述がある。

また、第五巻には、波上権現、洋権現、口塞那権現、普天間権現、末言権現、天久権現、道祖神、火神、疫神など、沖繩(琉球)各地に祭られている神々の由來や伝承などが記され、さらには沖繩(琉球)の国生みの神話や昔話、伝説、そして、当時の沖繩(琉球)の人たちの暮らしぶりなども記されている。

照一と、袋中上人は独自に沖繩(琉球)八景を選定し、それら景勝地を詠った八首の漢詩を作つた。しかし、それらは「只是一時ノ慰遊也、亦懶愧ヲ忘テ、此二書ス、日々修行や布教の台間で作つたもので、稚拙で恥ずかしいものではあるが、ここに掲載するとして、自作の漢詩を紹介している。

その一つ、「那覇夜雨」という作品は、

東西南北信風行、船止此折波濤平、憶想古郷宵夕切、淚兼細雨至深更、

というもので、読み下すと、「東西南北、風に信せて行く。船をこの折に止めれば、波濤、平らなり。古郷を憶想すること宵夕に切なり。涙、細雨に兼ねて、深更に至る」となる。

故郷いなきを遠く離れた沖繩(琉球)の地で、夕刻、穏やかな海を眺め、望郷の念にとらわれ、独り、涙を流す。その涙はいつまでも止まらず、夜はいよいよまけていくという。

袋中上人に対し、「強固な意志を持って学問の道に突き進み、人々の救済のために全身全霊を捧げる人間」というイメージを抱いていた私は、この時に初めて出合った時、「故郷を思い出し、いつまでも涙を流し続けるなんて、袋中上人らしくもない」と違和感を持った。でも今は違つた。この詩に登場する袋中上人に強い親しみを感じる。ゆづり話をしてみたいとも思



「袋中上人像(尚寧王御覽)」慶長16(一六一七)年、袋中上人の遺體を祝うため、薩摩(鹿兒島)の地で捕らわれの身となつていた琉球国の尚寧王が袋中上人の肖像を自ら描き、言葉添え、袋中上人に贈つた。京都府指定文化財。檀王法林寺蔵

「筆者はいわき明星大学客員教授の夏井芳徳氏」

一回は10月3日に掲載

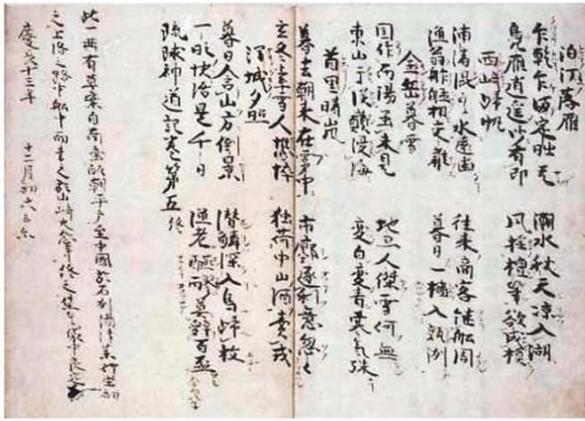
「ふくしま人 袋中上人」
 (「福島民報」平成27(2015)年9月26日掲載)

福島と沖縄を結んだ名僧

袋中 上人 ④

「沖縄(琉球)の歴史を書き残して欲しい」という琉球国の高官馬場明の強い求めに応じ、袋中上人が著した『琉球神道記』には、沖縄(琉球)の国主の神話が書とめられている。

黄 此国 初 未 夕 人 アラザル時 天ヨリ男女二人、下リシ。男ヲシネリキユト、女ヲアマミキユト云フ。二人、會テ並テ居ル。



『琉球神道記』江戸時代の初め、袋中上人が著した沖縄(琉球)の歴史書。この世の成り立ちやインドでの仏教の起り、中国の歴代王朝の歴史、諸仏の由来、沖縄(琉球)の神々、さらに沖縄(琉球)の国生みの神話や伝説、人々の暮らしがらひなどが記されている。国指定重要文化財。袋中藏蔵

琉球の伝説や風俗記す



沖縄県那覇市松山の松山公園。袋中上人は、この地にあった桂林寺に住持として招かれ、修行や布教にあたった。琉球国王の尚寧王や政府の高官などからも深い帰依を受けた

国生みの神話も記録

男神「シウキユト女神ア「マキユ」が小「シ」下、被三腰「島」天から降り立ち、木や草を植え、山や国を造ったという。また、二人は往來ノ風の仲立ちで、二人の正をももつてそれが王や神に仕える者として人民になった。さらに龍宮から火をもらい受け、それによって国ができあがり、多くの人々が暮らすようになったという。

また、『琉球神道記』には国王の逸話を伝える次のような話も所載されている。中比 此国王 大世ノ主ト申上ル。此、毒蛇ヲ恐テ、高樓ヲタテ、厚板ニシテ、ヨク囲ム。玉、誇テ云フ、毒蛇モ此ニハ来ベカラス。

又、柔軟ナリ。誠ニ龍宮世界ト云フ。沖繩(琉球)は年間を通し、寒くも暑くもない。また、草木はいつも青々と茂り、人々の気質も穏やかである。まるで龍宮のようだといわれているという。

世俗、櫻ヲ善ク。養テ用ザルコト。沖繩(琉球)の人たちは靴を履かず、また、雨でも蓑や笠を用いないという。人形、毛大也。髪、多シ。総シテ、物ノ工事ナシ、心、朴也。

時、幾ナラサルニ、左手ヲ齧ル時三司官ノ一人入リテ、即チ、王ノ腹ヲ切除シテ、我腹

また、『琉球神道記』には次のような記載もある。国主ヲ櫻ルニ、不寒不熱ニシテ、草木四時ニ萎テ、人心、

沖繩(琉球)の人たちは性格がよく、髪の毛が濃い。また、悪だくみをする事はない。どこまでも純朴であるという。

沖繩(琉球)の神話や国王の逸話に興味を抱き、土地の気候や風俗に関心を示し、人々の気質やふるまいを探り、それらを丹念に書き留める袋中上人の姿は、地域の事象を調査し、地域の人々に学び、地域の成り立ちに迫り、それを記録する「地域学の研究者のよう」に見える。(筆者はいわき明星大学客員教授の夏井芳徳氏)

主な参考文献

- 『琉球神道記』并連社中集(横山重編) 角川書店発行(昭和45年刊) 『いわきの寺』(佐藤孝徳監修) いわきの寺刊行会発行 昭和56年刊、『新しいいわきの歴史』(いわき地域学舎出版部発行) 平成3年刊、『袋中上人絵詞伝』(原田萬雄註) 格樹書林発行 平成15年刊、『檀王法林寺』袋中上人 琉球と京都の架け橋(信ヶ原雅文、石川登志雄著、談文社発行) 平成23年刊、『京都檀王法林寺開創400年記念 琉球と袋中上人』エイサーの起源をたぐる(九州国立博物館、沖縄県立博物館・美術館編集) 発行 平成23年刊

これら三つの記述は、袋中上人が自ら触れ、感じた沖縄(琉球)の風土を暮らし、さらには人々の気質などを書いたものだ。また、『琉球神道記』には次のような話も所載されている。昔、若狭町ニ若狭殿ト云フ者ノ妻、走り失又。夫、深ク悲テ、諸神ニ祈フト数十年、シカルルニ、三十二年ニシテ海ヨリ返ル。失シ時、其歳二十也。今、来テ、二十歳ヨリモ若シ。人、皆、他人也ト疑ヒ、夫モ亦疑フ。其妻云、此ニハ久トイヘ共我ハ野原ニシテ遊ブコトニ三日也。イッソ間ニ歸ラ転ズベキトテ、昔、夫ト比翼連リノ密語、一々ニ語シカバ、夫疑ヒ晴テ、モトノ如ク和合。初

『袋中上人』は終わり11 ※10日からは大玉村生まれでペルー・マチュピチュ村初代村長の野内与吉について、日本マチュピチュ協会副会長で孫の野内セサル長郎氏が執筆します。

「ふくしま人 袋中上人」(「福島民報」平成27(2015)年10月3日掲載)

袋 中 上 人 年 表

※『袋中上人絵詞伝』などを参考に作成。
年齢は数えて表記している。

西暦	年号	袋 中 上 人 の 出 来 事	主な出来事
1552	天文21	1月 現在のいわき市常磐に生まれる。父は賀氏、法名道祐、母は幡氏、法名妙喜。名は袋中、字は良定、弁蓮社入観。幼名は徳寿丸。	岩城重隆、飯野八幡宮に銅鐘を寄進する(1551)
1558	永禄元	春 7歳 能満寺の天蓮社(袋中上人の伯父)のもとで学ぶ。	
1560	永禄3	9歳頃 「三経一論」など経文を暗誦。	
1565	永禄8	3月14日 14歳 能満寺で出家。沙弥戒を受け、名を袋中とする。	
1567	永禄10	春 16歳 平・如来寺に学ぶ。	
1571	元亀2	20歳 平・専称寺に学ぶ。また、大沢・円通寺(栃木県芳賀郡益子町)にも学ぶ。	室町幕府滅ぶ(1573)
1574	天正2	23歳 大沢・円通寺で経論を講じる。	
1576	天正4	25歳 武城・三縁山(増上寺 東京都港区)、足利学校などで学ぶ。	
1580	天正8	29歳 広野町・成徳寺 <small>じょうとくじ じゅうじ</small> の住持になる。	
1581	天正9	30歳 いわき平・鎌田川で橋供養。『梵漢対映集』を著す。	織田信長、本能寺に滅ぶ(1582)
1583	天正11	春 32歳 『血脈論』を著す。	
1584	天正12	33歳 『麒麟聖財論私釈』を著す。	
1585	天正13	34歳 『大原問答端書』を著す。	羽柴(豊臣)秀吉が関白となる(1585)
1587	天正15	36歳 『啓袋』を著す。	尚寧王即位(1589)
1599	慶長4	48歳 飯野平城内 <small>ぼだいじん</small> ・菩提院の住持となる。 流行病蔓延、疫病神と対話、薬を受け、病を静める。(慶長6~7年頃との記録もあり)	豊臣秀吉、朝鮮に出兵。文禄の役(1592) 慶長の役(1597) 関ヶ原の戦い(1600)
1603	慶長8	52歳 中国に渡るため、京都を出、船便を待つ。 フィリピンを経て、沖縄に渡り、琉球国王 <small>しゅうきゅうおう ぼ こうめい</small> ・尚寧王や馬幸明の帰依を受ける。桂林寺の住持となる。	岩城貞隆、領地を没収される(1602.5月) 鳥居忠政、磐城に入封(1602.11月)
1605	慶長10	54歳 『琉球神道記』を著す。	徳川家康が征夷大将軍となる(1603)
1606	慶長11	55歳 沖縄を離れ、九州筑紫・善導寺に寄り、その後、西国行脚。	薩摩藩・島津氏の琉球侵攻(1609.4月)
1611	慶長16	春 60歳 京都・三条河原町に庵を結ぶ <small>だんのちほうりんじ</small> 。後の檀王法林寺。 尚寧王より肖像画が贈られる。	尚寧王の参府(1610)
1619	元和5	夏頃 68歳 洛北氷室山に移る。東山菊溪に小庵を結ぶ。	尚豊王即位(1621)
1622	元和8	71歳 庵室を大佛殿の近くに移す。後の袋中庵。 夏 奈良に赴く。浄瑠璃寺の修復に寄与。 冬 城州相楽郡西尾九体仏の近くに住む。	鳥居忠政、山形へ転封し、内藤政長、磐城に入封(1622.9月)
1624	寛永元	1月25日 73歳 <small>みかのほら</small> 瓶原・天神宮で7日間、参籠。	
1626	寛永3	春彼岸 75歳 信者に十念を授く。	
1628	寛永5	77歳 知恩院の靈岩和尚と問答。	
1630	寛永7	3月23日 79歳 仏の姿を見る。	
1637	寛永14	86歳 瓶原 <small>いのおか</small> ・心光庵を出、綴喜郡飯岡村に庵を設ける。後の西方寺 <small>さいほうじ</small> 。	島原の乱(1637)
1638	寛永15	87歳 三の峯に石仏3体を造立。 冬 病を得る。	祐天上人が江戸・増上寺の住職に就任(1637)
1639	寛永16	1月15日 信者に十念を授く。 1月16日 臨終の道場を設る。 1月20日 遺言。 1月21日卯の刻 永眠。88歳。 1月22日 <small>だび</small> 荼毘。 1月23日 拾骨。	鎖国令(1639) 【全国的な出来事は黒、沖縄(琉球)の出来事は赤、いわきの出来事は緑で表示】

>>> 参 考 資 料 <<<

- ◆ 『いわき市史 第1巻 原始・古代・中世』 いわき市史編さん委員会 いわき市 1986 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわき市史 第2巻 近世』 いわき市史編さん委員会 // 編 いわき市 1975 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわき市史 第6巻 文化』 いわき市史編さん委員会 // 編 いわき市 1978 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわきの人物誌 (上)』 いわき地域学会 // 編 いわき市 1992 (K/281/イ)
- ◆ 『新しいいわきの歴史』 いわき地域学会出版部 1992 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわきの寺』 いわきの寺刊行会 1981 (K/185/イ)
- ◆ 『図説 いわきの歴史』 郷土出版社 1999 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわきふるさと大百科』 郷土出版社 2007 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『磐城誌料叢書 第1輯』 諸根樟一 // 解題 勿来文庫 1930 (K/210.0-1/イ)
- ◆ 『琉球神道記 弁蓮社袋中集』 横山重 // 編著 角川書店 1970 (K/172/タ)
- ◆ 『袋中上人絵詞伝』 原田禹雄 // 訳注 榕樹書林 2003 (K/188/タ)
- ◆ 『檀王法林寺』 信ヶ原雅文 // 著 淡交社 2011 (K/188/シ)
- ◆ 『琉球と袋中上人展』 九州国立博物館 沖縄県立博物館・美術館 2011 (K/188/リ)
- ◆ 『袋中上人』 信ヶ原良文 // 著 檀王法林寺 1937 (K/188/タ)
- ◆ 『袋中上人餘光』 信ヶ原良哉 // 編 檀王法林寺 1938 (SK/188/タ)
- ◆ 『袋中上人 - 生い立ちとその行跡 - 』 信ヶ原良文 // 著 だん王法林寺 1988 (K/188/タ)
- ◆ 『袋中上人 開山と略伝』 浄土宗涅槃山袋中寺菩提院 // 編 菩提院 1991 (K/188/タ)
- ◆ 『歴史智曼陀羅 - 文化史断章 - 』 鯨岡勝成 // 著 第一書房 2003 (K/104/ク)
- ◆ 『沖縄エイサー誕生ばなし』 御代英資 // 著 東洋出版 2008 (K/188/タ)
- ◆ 『専称寺史』 佐藤孝徳 // 編 佐藤孝徳 1995 (K/185/サ)
- ◆ 『如来寺史』 佐藤孝徳 // 編 松峯山如来寺 1996 (K/185/ニ)
- ◆ 『沖縄県の歴史』 安里進[ほか] // 著 山川出版社 2004 (219.9/オ)
- ◆ 『琉球文学の歴史叙述』 島村幸一 // 著 勉誠出版 2015 (K/910.2/シ)
- ◆ 「奈良地域関連資料画像データベース」 奈良女子大学学術情報センター
- ◆ 「貴重資料デジタル書庫」 沖縄県立図書館
- ◆ 「檀王法林寺ホームページ」



平成 27(2015)年 10 月 20 日 発行

■編集 いわき市立いわき総合図書館

■発行 いわき市立いわき総合図書館

企画展「袋中上人 - いわき・沖縄・京都 - 」

■会期 平成 27(2015)年 10 月 20 日(火)ー平成 28(2016)年 1 月 24 日(日)

■会場 いわき総合図書館 5 階 企画展示コーナー